

# おふでさき 世界の歩く

第

10

回

## 山澤昭造

「やまざわ しょうぞう」

本部准員

天理教校本科研究課程主任

二号25—47

二号25のお歌からは、「せかい」に向かっての布  
教伝道が話題となります。まず、二号25—30では、  
心を「すます」ということが述べられます。

二号25—30  
いかなる水も澄ますことなり

高山のをいけにハいた水なれど  
てばなハにこりごもくまぢりて

(二 25)

だんくくと心しづめてしやんする  
すんだる水とかハリくるぞや  
山なかのみづのなかいと入こんで  
いかなる水もすます事なり  
にちくに心つくするそのかたわ  
むねをふさめよすゑハたのもし  
これからハ高山いけいとびはいり  
いかなごもくもそふぢするなり

(二 26)

(二 27)

(二 28)

(二 29)

こもくさいすきやかだしてしもたなら  
あとなる水ハすんであるなり

(二 30)

〈澄んだる水と変わりくるぞや〉

25は、「高い山にある池に湧き出た水であっても、その出端でば(噴き出た瞬間)」というものは、濁っている、ごみが混じっている」という意味です。

人里離れた高山の池に湧き出た水というと、人が飲めるようなきれいな水を想像します。しかし、そうしたきれいな水であっても、勢いよく噴き出している場面(湧き出た瞬間)を見てみると、いろいろな塵ちりなどが混じって濁っているものです。そのような、池から、湧き水が噴き出している場面を想像しつつ、このお歌を読ませていただきたいと思えます。そして、このお歌で言われる「出端」とは、この道の教えを聞いて、信仰をし始めたばかりのころのことを指した、たとえです。

つまり、人間の心というものは、もともと高山の池のようにきれいな水なのですが、日々の生活を重ねるなかで、どうしても心に「ほこり」を積み重ねてしまっています。この道の教えを聞く前は、どの

ような人であっても、心に「ほこり」が混じっている、それに気づかないでいるのです。

しかし、それが、「だんだんと、この道の教えを聞き、心を静めて思案するなかに、心の使い方も分り、澄んだ水のような、きれいな心が変わってくる」(26)と教えられるのです。

「みかぐらうた」に、

よくにきりないどろみづや

こゝろすみきれごくらくや

(十下り目 4)

と示されるように、心を澄みきらせて生きるところに、この世は極楽であると感じ取ることができる。

「陽気ぐらし」をすることができるようになると教えられます。

なお、「おふでさき」の中で「高山」という言葉は、「社会的立場において上層にあり、世俗的権力を持つている者」をたとえて表現されたものですが、25のお歌に限っては、一般的な意味での「高い山」「奥深い山」の意味で解釈されることがあるようです。しかし、「お池」というように丁寧語の接頭辞が付けられている点から思案して、「たとえ、社会的上層にいる尊い立場の人であっても」という意味



をここでは掛けて使われているのではないでしょう  
か（29も同様です）。

### 〈山中の水の中へと入り込んで〉

25、26で、お道の信心によって心が澄んでくると  
教えられましたが、続く27で、親神様は、これから  
世界中の人々の心を澄ましていくと述べられます。  
お歌の中に出てくる「水」や「池」は、人の心や胸  
のたとえになります。

まず27の「山」は、人間社会のたとえです。つま  
り、これから「せかい」の人々の心の中へ、親神が  
入り込んで、どんな水、すなわちどんな心の者であ  
っても、澄ましてしまう。親神様が、これから世界  
中の胸の掃除に掛かると言われているのです。

そして、28では、これまでお道を信仰し、日々、  
真実の心を尽くしてきている人々に対して、神が働  
いた結果、末の将来は誠に頼もしい道が見えてくる  
から、心を治めてついてくるようにと諭されていま  
す。

28の「そのかた」は、「それ以後」という意味で

あり、「みかぐらうた」七下り目の「たねをまいた  
るそのかたハ」と同じ使い方になります。

29、30では「これから親神は、高山の池に、つま  
り社会の上層の人々を含め、どんな人の心の中にも  
飛び入って、どんなごもく（塵埃<sup>じんあい</sup>）も掃除してしま  
う」「ごもく、つまり心のほこりさえ、すっきり出  
してしまつたなら、あとに残つた水はみな澄んでき  
れない状態である」というように、あらためてこれ  
までの流れをまとめておられます。

つまり、親神様は、これから積極的に世界中の胸  
の掃除に取りかかり、人々の心を澄ましていくと宣  
言されたのです。

## 二号31—36 「から」と「ほん」の話する

これからハからとにほんのはなしする

なにをゆうともハかりあるまい

とふぢんがにほんのぢい、入こんで

ま、にするのが神のりいふく

たんくくとにほんたすけるもよふだて

(二 31)

(二 32)



とぶじん神のまゝにするなり (二 33)

このさきハからとにほんをハけるてな

これハかりたらせかいをさまる (二 34)

いま、でハ上たる心ハからいで

せかいなみやとをもていたなり (二 35)

これからハ神がたいない入こんで

心すみやかわけてみせるで (二 36)

〈「から」と「ほん」とは〉

続く、31から36では、「から」と「にほん」ということが話題になります。

31において、これから、「から」と「にほん」にたとえての話をしようと思うが、親神が何を言おうとしているのか、おまえたち人間には、よく分からないだろう、と最初に断られています。

一般に、「から（唐、韓）」とは、中国や韓国を指し、広く外国を意味する言葉です。しかし、「おふでさき」の中で使用される「から」や「にほん」は、あくまでたとえであり、地理的、政治的な意味での、現実の国家を指すものではないと、あらかじめ注意を促されています。

それでは、「から」と「にほん」とは、何を意味するのか。このことについては、「元初りの話」に基づいて思案するようにと教えられます（※1）。

「こふき話」の十六年本（榊井本）によると、人間は、三尺に成長したときに、ものを言い始め、それにつれて天地海山が分かりかけ始めました。そして五尺に成人するまでは水中に住まいし、五尺になるまでに、成長に応じ、天地海山、水土が速やかに分かれていったといえます。水中の住居から陸上の住居へと上がることになったのです。

このときに、

人かす九億九万九千九百九十九人のうち、やま<sup>大</sup>和<sup>内</sup>のくにゑうみしろしたる人げんわにんほん<sup>日</sup>の<sup>本</sup>地に上り、外<sup>の</sup>くにゑうみおろしたる人間わじき<sup>食</sup>もつをくいまわり、から<sup>唐</sup>てん<sup>天</sup>しくの地あかりゆき<sup>行</sup>たものなり。（中山正善「こふきの研究」道友社、昭和32年、138―139ページ）

というように、最初の産み出しで奈良初瀬七里四方の間に七日かかって産み下ろされた魂の者と、残る大和の国中に四日かかって産み下ろされた魂の者は、「にほん」の地が上がったが、残りの六十四日の間

に、各地へ産み下ろされた魂の者は、「じきもつ」を食い回り、「から」「てんじく」へ上がったのだと記されています。

そして、この食い回ったときの状況について、別の「こふき話」では、次のように記しています。

……だんくくと、人間の成人に応じた<sup>じきもつ</sup>けの食物ハ、月日の守護でどろうみ中へ支へて来た。その食物を人間三尺に成りた時分からして、よくがついてきて、あちらこちらくいまはりて、むかふへくくと食物のないほふまで尋ねていつて、くひまわした。そのものが、皆からてんじくの地<sup>あが</sup>へ上りた、と聞<sup>きか</sup>せられます。

（諸井政一「古記其の三」『改訂正文遺韻』山名大教会史料部、平成26年、150ページ）

つまり、親神様は人間の成人に応じて、何不自由のないよう食物を十分に与えられているのに、それだけでは満足できず、よその食物を求めて食い回りにでた者がいた。これらの者が「から」「てんじく」の者だと言われていることが分かります。（それに対して、天よりの与えに満足していた者が、「にほん」の者になります。そして、「こふき話」からす

ると、すべての人間はもともと「にほん」の者であったことになります）

これら「こふき話」の記述においては、「から」と「にほん」が現実の国家を指すように読めてしまうところがあり、その点にだけは注意を要しますが、「おふでさき」における「から」と「にほん」を理解するうえで大事な手がかりになるのではないかと思案します。

要は、「から」と「にほん」は、親神様のお心との距離を表す表現なのではないでしょうか。「にほん」の者とは、親神様のお心に近い者、つまり「親神様の思召<sup>おぼしめし</sup>を聞き分けた者」であり、それに対して、「から」の者（とうじん）とは、親神様のお心から遠い人、つまり「教えをいまだ聞き分けない者。これから聞き分ける者」を意味するのではないかと思案するのです。

（「こふき話」の記述を踏まえると、「にほん」の者は、教<sup>おしえ</sup>の理を聞き分けて、「かりもの」の理が胸に治まった者。それに対して、「から」の者は、「かりもの」ということを理解せず、自分の知恵力で生きていると思ひ、我<sup>わが</sup>が心のままに、強欲を出して、



勝手な心を使い、神様のご恩をないがしろにする者  
ということもできるのではないでしょうか。(※2)  
31からは、布教伝道の場面を、「から」と「にほ  
ん」の言葉にたとえて、話を進められます(※3)。

〈「とふじん」を神のままにする〉

32の「ぢい、」は、「地へ」という意味です。地  
は、原典において、人間の心、あるいは心の世界の  
たとえとして用いられます。国語辞書を調べると、  
「地」には、「生まれつきの性質。もちまえ。本性。  
本心」という意味があり(※4)、「心地」(しんじ)「心田」  
(しんてん)などのように、心を田や地にたとえた言葉もありま  
す。

それでは、ここで、「とふぢん」(「から」の者)  
が入り込んで「ままにする」(思い通りにする)、そ  
れが親神の立腹とするとところだ、と言われているの  
は、どういう状況を意味するのでしょうか。

これは、「から」の人たち(つまり、親神の思い  
の分らない人たち)の人間心の考えが、「にほん」  
の人たち(つまり、親神の思いに生きる人たち)の  
心の中にも入ってきて、それが支配的となってい

っている。そして、結果として、親神の思いが分か  
らなくなり、受け入れられなくなってしまうている  
(※5)。親神様の目からご覧になつての、世の中の  
状況を述べられているのです。

しかし、こうしたままでは、人間はたすかかってい  
きません。親神様の思いから遠く離れている「か  
ら」の人たちにも、親神様のお心を伝え、本来の生  
き方ができるよう、だんだんと導いていかななくては  
なりません。そのことを言われているのが、33のお  
歌です。

33では、「にほん(の人)」をたすけていって、  
「とふじん(「から」の人たち)」の心を、親神様の  
思いにかなうようにしていくと言われています。

「よふぼく」に入り込み、「よふぼく」と共に、親  
神様の思いをこれから伝えていきたいと言われている  
のです。この布教伝道の場面において、「にほん」  
の者は、「よふぼく」と言い換えることができるで  
しょう。

〈「から」と「にほん」を分ける〉

この親神様の思いを伝えていくということが、34

にある「からとにほんをわける」という表現です。

ここでの「わける」は、「二つにわける」「分断する」「区分する」という意味ではなく、「道理を説いて、違いを分かるようにする」という意味です。

つまり、親神様は、これから「にほん」の者（よふぼく）と共に、「から」親神様の思いの分からない生き方）とはこういうもので、「にほん」親神様の思いに基づいて生きる）とはこういうことであると、「分かるようにしていく」、胸に治まるようにしていくのだと言われているのです。

そして、このことが分かることによって（世界中の人々の心はみな「にほん」となり）、世界は確かに治まってくるのです。

### 〈今までは「上たる心」分らないで〉

34で、「から」と「にほん」を分かるようにしていくと言われましたが、35、36では、ゆくゆくは「上」の人たち（つまり世界を実際に指導している人たち）にも、布教伝道していったって、親神の思いが分かるように導いていきたいと述べられています。

つまり、「これまで、『上』に立つ者たちの心が、

分かっていなかったので、教祖の教えを世界並みのありふれたもののように思っていた」（35）。しかし、「これからは、親神が、人々の体内に入り込んで、心をつきりと分かるように導いてみせる」（36）と、いうのです。

このような「高山布教」と呼ばれるものが、実際に行われるようになったのは、明治七（一八七四）年秋の「大和神社のふし」を契機としてです。しかし、それに先立つ明治二年の段階で、教祖は、その構想を示しておかれたのです。

### 〈神が体内に入り込んで〉

36に、「神が体内に入り込んで」とあります。「神が体内に入り込む」とは、どういうことでしょうか。まず一つは、親神様が「にほん」の者に入り込むという意味です。つまり、親神様が「よふぼく」に入り込まれ、にをいがけ・おたすけのうえで、不思議な働きを現される。そのことによって、「から」の者の心分かるように導いていくと言われているのです。

そして、もう一つは、親神様が広く人々の心に入

り込んで、その心通りを表に現されるという意味です。心通りを表に現されると、その多くは「身上のさわり」や「事情のもつれ」となって現れてきます。心づかいを身上や事情に現すことによって、それらを契機として導いていかれるのです。

ここでは、この両者の意味を含んだものとして解釈したいと思います。

以上、二号25―30で、心を「すます」ことが話題とされたのに対して、31―36では、「から」と「ほん」を分ける（親神様の思いを分らせる）ということが話題とされました。世界の人々の心を澄まし、親神様の思いを分らせていくことが、この道の布教伝道であると言われているのです。

二号37―47  
珍しい、この世創めの「かんろだい」

にちくによりくる人にことハりを

ゆへばだんくなをもまあすで

いかほどのをふくの人きたるとも

なにもあんだな神のひきうけ

(二 37)

(二 38)

めつらしいこのよはじめのかんろだい

これがにほんのをさまりとなる

高山に火と水とがみへてある

たれがめへにもこれがみへんか

たんくといかなはなしもといてある

たしかな事がみゑであるから

しやハせをよきよふにとてじうぶんに

みについてくるこれをたのしめ

なにもかもごふよくつくしそのゆへハ

神のりいふくみへてくるぞや

たんくと十五日よりみゑかける

善とあくどハみなあらハれる

このはなしとこの事ともゆハんでな

みへてきたればみなとくしんせ

高山のにほんのものとふちんと

わかるもよふもこれとはしらや

とぶじんとにほんのものとハけるのハ

火と水とをいれてハけるで

(二 39)

(二 40)

(二 41)

(二 42)

(二 43)

(二 44)

(二 45)

(二 46)

(二 47)

〈これが「にほん」の治まりとなる〉

これまで、布教伝道の構想について述べられてき

たので、ここでは、将来の道の姿について話題が及んでいません。

37の「ことわり」は、「断り」の意味のほかに、「理（道理、真理）」の意味にも理解することができま（※6）。

「まあす」とは、方言で「まとわりつく」という意味ですが、ここでは「慕い寄る」という意味です。

「日々におやしきへ寄って来る人々に、道の理を伝えたら、なおも慕い寄って来るようになる」（37）。

そして将来、「どれほど多くの人がおやしきへ慕い寄って来たとしても、何も心配する必要はない。神が引き受ける」と、おそばの人に言われているのです。

さらに、39では、いずれは「珍しい、これがこの世創めた証拠として据えられる、かんろだい」か」と言つて、大勢の人々が「おやしき」へ集まってくるようになり、「かんろだい」を囲んで「おつとめ」が勤められる。これによつて、「にほんの治まり」とも言える状況になるのだ、と言われています（※7）。

原典の中で、「かんろだい」という言葉の初出は、「おふでさき」のこのお歌になります。「かんろだい」の「ちば定め」は、明治八年のことであり、このお歌が記された時点ではまだ「ちば」も明かされていませんが、将来の姿を述べておられるのです。

なお、39では「せかい」の治まりではなく、あえて「にほん」の治まりと言われています。これは、世界中の人々がいずれ「にほん」の心となる、そのことを踏まえたうえでの表現なのではないでしょうか（※8）。

37から39で将来の話をされました。そのうえで、40では、その一端として、「高山のほうでは、火と水に代表される親神様のお働きが今からすで見えているのではないか」と述べられています。35と36で「高山布教」に言及されましたが、教祖の目には、すでにその兆しが見えかけていると言われているのです。

#### 〈仕合わせを良きように〉

このように、親神様は順序を追って、どのような話も前もって説き聞かせてくださっています（41）。

そして、仕合わせ（めぐり合わせ。運命）が良くなるように、十分に身につけてくるようにと、私たちを導いてくださっているのです（※9）。だからこそ、私たちは、将来見えてくるこの確かな道を、楽しんで通らせていただくことが大切です（42）。

もしも、そのことが分からず、何もかも強欲を尽くして通ってしまっていては、「神の立腹」が現れてきてしまうような結果に陥ってしまいます（※10）。そのような状況に可愛い我が子を陥らせたくはない。そうした親心から注意を促されたのが、43のお歌です。私たちの心は、旬が来たならば、善悪ともに皆現れてくるのです（44）。

いずれは、大勢の人がこの「おやしき」にやって来るようになるとともに、高山の人々にも道を伝えていくことになる。だからこそ、神の言うことを信じ、先を楽しんで、この道を通ってくれと望まれているのが、これらのお歌ではないでしょうか。

なお、44に関しては、『おふでさき註釈』にも記されている通り、松尾市兵衛まつおいちべゑという先人の長男に関する史実が昔から伝えられています。

ただし、このお歌が、その出直しを予言されたものかという点、そうではないように思います。松尾氏の長男の出直しは、明治七年七月十五日のことであり（※11）、「おふでさき」第二号が執筆されてからずいぶん後のこととなります。長男の出直しに接した人々が、二号44のお歌に思い至られたのではないのでしょうか。

「十五日」に関して、芹澤茂せりざわしげる『おふでさき通訳』（道  
友社、昭和56年）は次のように指摘しています。

「十五日より」（四四）と言われるのは、旬しゅん（天然自然の成り行きのうえで親神の働きに一番都合のよい時）とか刻限（親神が人間の行ないを見ていて働きかけをされようとする時）を示す言葉である。陰暦（旧暦）では十五日や三十日（みそか）を境に月の満ち欠けがみられる。

（同書、62ページ）

45では、この今している話は、どこの誰のことを指すのか具体的なことは何も言わないが、心通身の上や事情に現れて、見えてきたら、みな得心をしてもらいたい、と記されています。

## 〈これも「はしらや」〉

46は一読しただけでは、意味の採りにくいお歌です。高山の者に対して、「にほん」の者とはこういうもの、「とうじん」の者とはこういうものと同分るように導いていく、その段取りに関して、これも「はしら」が関係している、という意味になります。「はしら」については、第三号であらためて解説しますが、ここでは「かんろだい」、より厳密にいうと「かんろだいのつとめ」を意味します。

「かんろだいのつとめ」については、39で、これによって、世界の人の心が「にほん」となり、世界が「にほんの治まり」とも言える状態になるのだと述べられていました。それに対して、46では、高山へ布教していくその段取りについても、「かんろだいのつとめ」が関係していると述べられているのです。

そして、続く47では、「とうじん（からの者）」がどういふものであり、にほんの者がどういふものであるかを分らせていくといつても、それは火と水という親神様の守護、働きを入れて分らせていくとあります。

つまり、46と47では、「おつとめ」を勤めること

によって、「火水」に代表される親神様の不思議珍しい守護、働きを現していく。それが、神の話が真実であるという「証拠」となり、それによって「高山」の人々へも教えが伝えられていくと言われているのです。

「高山」の人は権力を握っている人たちであり、自分の知恵、力を頼りとして生きていくものです。そのような人々に対しては、ただ話を説くだけでは、なかなか伝わるものではありません。人間の知恵、力を超えた親神様のご守護の姿を示すことで、親神様や教祖のこと、あるいはその教えが真実であると「信じられる」ような状態にまで導く必要があります。それを、「かんろだいのつとめ」ですと言わ

※1 上田嘉成『おふでさき講義』三版、道友社、昭和50年、37―38ページ参照。

※2 「から」は、「空」「虚」にも通じる（殼と空は同語源）。また、「とうじん」は「蕩尽」「盗人」「遠人」にも通ずると思案する。

れているのです。

「おつとめ」には「証拠」としての意義があり、布教伝道のうえで、大きな役割があるのです。

第二号では「せかい」への布教伝道の基本的構想が描写されました。

・「せかい」の人々の心を「すます」こと

・「から」と「にほん」を「わける」こと

・高山へ布教していくこと

・「つとめ」の証拠としての意義

これらの事柄が、以下の号で順を追って展開されます。



※3 芹澤茂『おふでさき通訳』道友社、昭和56年、57―58ページ参照。

※4 『日本国語大辞典第二版』第6巻、小学館、平成13年、431ページ参照。

※5 天理大学おやさと研究所編『天理教事典 第三版』平成30年、237ページ参照。

※6 上田嘉太郎『おふでさき通解』道友社、立教180年、54―55ページ。上田嘉世「ふ

でのさきがなみへてきたならおふでさき解説』あらきとうりよう』276号、48ページ。

※7 「筆先私想」増野鼓雪全集』第11巻、153―160ページ参照。

※8 芹澤茂『おふでさき通訳』61、649ページ参照。

※9 『日本国語大辞典第二

版』第6巻、439ページ）によると、「仕合」は、「しあわす（為合）」の連用形の名詞化したもので、「めぐり合わせ。運命。なりゆき。機会（よい場合にも、悪い場合にも用いる）」の意味。

※10 「おふでさき」では、「強気強欲」について次のように述べられている。

「このよふハーれつハみな月日なり になけんハみな月日かしのもの（六 120）」「せかいぢうこのしんぢつをしりたなら ごふきごふよくだすものわな（六 121）」

「かしの・かりもの」の理が胸に治まれば、強気強欲を出す者はないと諭されている。

※11 『天理教平安大教会史』令和4年、25ページ参照。

・2月号本欄「※6」に挙げた資料の著者名に誤りがありました。正しくは「松本滋」です。お詫びして訂正いたします。